

マルヤマ・マサアキの作品について

海外での生活がどれほど長くても、自国の文化に深く根付いた芸術家がいるものだ。マルヤマ・マサアキはそうした印象的な日本人芸術家の典型である。日本の文化は西洋的視点からすれば、まったく異質で、そのプライオリティーはまったく別種のものである。醸し出される雰囲気や情感、さらにまた、形態や表面の調和、これらへの研ぎ澄まされた感受性にその特徴を見ることができるが、そこには諸力の緊張関係から生まれるバランスが保たれている。それも、このバランスは精神的なものの表現にさえなるのである。これこそ、現代でも変わらない東アジアの、そして日本の芸術の本質だろう。

ヨーロッパの影響がどれほど降り注いだにしても、マルヤマはマルヤマ自身の道を歩み続けた。マルヤマは、ヨーロッパの芸術とそのコンセプトの影響を吸収しながらも、自己の根を断ち切りはしなかった。例えばよく言われるように、外面的にすぎないとしても、マルヤマにはブランクーシの影響が顕著である。だが忘れてならないのは、ブランクーシ自身が、おそらくは日本の影響を受け、抽象化や凝縮などを行っていることだ。こういったことは今日なら、芸術活動の活発な、どの文化圏にも見られる自明の基本的なポジションである。そのほか指摘されるべきこととしては、パリや万国博覧会が発端となり、ヨーロッパが19世紀末に木版画をはじめとする日本の芸術と出会ったことからわかるように、日本の影響は相当なものであって、ヨーロッパの現代芸術の発展に本質的なところで寄与したということがある。

マルヤマはヨーロッパの、特にイタリアとドイツの生活が長い。大学での研鑽は渡欧以前にとくに終えていたが、ふたたび学生として学んでもいる。そして1996年に最終的に帰国している。だがそれは単なる転居ではなく、内面と芸術性の帰国でもあった。現在のマルヤマの仕事を1996年までの木彫作品と比較すると、根の部分は断たれるどころか、揺らぐことさえなかったことが見て取れる。1996年の個展のカタログに寄せた文章で、わたしはすでに一度そういった意味の解説を試みた。当時、残響という意味に近い「ヨ・イン」という日本語を使って呼んだものは、今の作品にも響いている。余韻は、ブロンズにおいて作品の完結性が増すにつれ、いっそうはっきりと聞こえるようになった。マルヤマのブロンズには、この余韻を空間の構成要素たらしめる力がある。言い換えれば、これらの彫刻は空間を生起させる。作品は生起する空間を示す印であり、同時に、空間全体の象徴でもある。形態はきわめて単純だ。矩形のブロックである。それ自体で完結しているが、圧縮されたエネルギーを内包している。それでいて口を開けているようにも見えるのは、暗示程度につけられた直線的な「溝」や、もしくは亀裂によるところが多い。これらの溝は完結したものの壊れ

やすさを警告している。壊れやすさはズレともなるだろうし、作品にある種のリズムを付与しもある。こうした壊れやすさから生ずる傷は、マルヤマが表面から小さな矩形を切りとったかのように取り出すことで、時として非常な具体性をもって現れてくる。

木彫に代表されるかつての多くの作品には、ある種の可視的運動とも呼べる、弧をなす輪郭がそなわっていた。そこにあった運動は、ブロンズ作品においては内的な緊張へと姿を変えており、同時に緊張をはらむ静を醸し出している。見る者は、いわばその中に引きずり込まれる。とは言っても自己の放棄、自由の放棄を求めてはいない。芸術家マルヤマにとっても、自由は重大事である。しかしそれは、目的を果たすこと、すなわち本質的なものの把握に他ならない自由である。把握された本質は精神的な支えとなって、自由を真正で確かなものにする。と言うのも、この精神的な支えを認めなければ、自己の責任を担い得るだけの支えを認めなければ、自由は現実のものとはなり得ないからだ。

マルヤマは一貫して表面構成に大きな意義を見てきた。木彫の表面には強烈な構造化が施されている。同じようなへこみが全面を覆っている。ブロンズの彫刻の表面には、自然にそうなったかのような、さびが付いている。それをわたしは生の暖かみと呼びたい。すでにこのことでも、マルヤマはブランクシーと一線を画している。ブランクシーの作品はそのほとんどが、ぴかぴかに磨き上げられている。日本人は昔からそうした光沢の強さをあまり好まなかった。強い光沢は人間と客体と自然との間に隔たりを設けてしまうと言えるかも知れない。マルヤマの作品を覆っているさびが偶然のものであれ、意図的なものであれ、それにより人間と客体との交流ははるかに容易になる。視覚を介しての出会いによっても触覚を介しての出会いによっても、交流が生まれる。交流が生まれると、見る者も作品も、そこにできる全体の部分になる。総体的に見るならば、こういうことが唯一可能となるのは、作品に内的調和と外的調和の両方がそなわっているとき、作品が単に空間を有しているというだけでなく空間を創造しもあるとき、そしてそれにより空間がある本源的な質を獲得するときである。マルヤマ・マサアキの仕事は、そのことを、はっきりと示している。

イルムトラウド・シャルシュミット=リヒター

美術評論家 フリーランスキュレーターペンクラブ会員

国際美術評論家協会会員、ドイツ東洋美術研究会会員

2004